せめて彼に、風を

オールディール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せめて彼に、風を

【Nコード】

N0666Q

【作者名】

オールディー

【あらすじ】

この胸の痛みすら、

大きな代償と共に引き替えて得たたもの。

仮面ライダー剣より。

剣崎がジョーカーとなって数年。天音の高校の入学式に始がある決意をします。

夢のかたみ

剣崎っ！

はっとして、おいすがつたがまた間に合わなかった。 待つてく

れ…剣崎！

必死に手を伸ばしたが、間に合わない。

泣きそうな笑い顔をした剣崎は、あっという間に姿を消してしまっ
た。

残された始の耳には、打ち寄せては消える波の、優しい音だけが聞
こえる。

「……剣崎……」

目を開いて見えたのは、見慣れた天井だった。

しばし、夢と現実の狭間を歩き来して始はため息を吐く。

時計を見ると、まだ少し早かったが寝るには中途半端だった。

起き上がって、寝間着から着替えて始はもうすっかり体に染み付い
た動きで、エプロンを身につける。

同じ…夢…。

たん、たん、と階段を上りながら、思考は一辺へ引き込まれる。あ
の日から忘れることのない一部。繰り返し、繰り返し、その日から
時は流れていないのではないかと思うほど…鮮明なあの日。

だが、現実では。

「あれ、皆さん早いね ！」

「おはよう、天音ちゃん」

おはよう、と笑って二階から降りてきた少女はキッチンでぐるりと
一回転した。

「 どう？ 」

彼女の動きにあわせて、ひらりと翻るスカート。真新しいブレザー
を着た天音に始は笑った。

「似合うよ」

「 始さんっていつつもそう言うんだもん」

少し不満そうな顔をした天音に思わず始は笑いだす。なんで笑うの、と冗談まじりに始をぺちぺちと叩く。

「 天音、急がないと」

二階からやってきた、遥香もまたスーツを着ていた。胸に取り付けられた大きなコサージュと、アクセサリー類が華やかさを醸し出す。

今日は、天音の高校の入学式だ。

必死に勉強して、ようやく天音が笑った受験結果。遥香と共に始もまた喜んだ。こんな、当たり前のような生活も…彼の親友の犠牲によってなりたっている。

どうしても彼のことを思い出してしまう。

あの日からもう六年近い月日が経ったのだ。

幼かった女の子が、ひとりの少女へと花開いていく姿を、身近で見守って始も時の流れを思い知らされずにはいられない。

だから。

始は、決めていた。

母の言葉に「はい」と頷いた天音に、始は不思議そうな顔をした。まだ時間はある。そう思っていた時、ふいに遥香がささやく。

「 始さん、ちょっといいしら 」

「 ……はい? 」

不思議そうに返事をした彼が連れられたのは、普段あまり行かない栗原晋の遺品がまとめられている部屋だった。いまだにこの部屋に入ると、始は後ろめたい気持ちになる。

「 これ、良かったら着て? 」

そういつて差し出されたのはスーツだった。おそらく、生前の晋が着ていたのであるう。

「 遥香さん…? 」

その意図が掴めずに首を傾げる始に、遥香は告げた。

「 天音が 入学式に来てほしいって 」

虚を突かれて、始は目を見張る。

「 ……これまで、行事の度に 実は天音言ってたの 」

それは 始も知っていた。昔から、運動会や発表会という行事のたびに天音は、それとなく始にそれを匂わせていた。

「 聞いてやってくれるかしら…? 」

それを、今になって言った遥香。

始は悟った。

彼女もまた、始の決意を…知っているのではないか ?

「 ……ありがとうございます 」

始は、そういつて そのスーツを受け取った。

夢の終わり

「 ちょっと大きいかしら…? 」

おそろおそろ そんな感じで出てきた始を見て、遥香が席を立ち上がった。

「 …… 始さん… 」

言葉を失った天音の姿に、始は少し不安そうに首をかしげた。始はあれからもずっと服のレパトリーを増やすことはなかった。たまに天音に勧められたものを、買うくらいで。

「 …… どうかかな? 」

弱々しくたずねた彼に…めでたい日だというのに 泣いてはいけないのに、なぜかそうなるのはなぜか。

天音は立ち上がると、手に隠し持っていたネクタイを、始の襟に通す。

「 こっちの方が、もっといいよ 」

遥香に教えられた通りに、それを通す。綺麗にできた結び目にくこりと笑う天音に、始もまたつられるように笑う。

「 …… じゃあ、行きましようか 」

遥香も笑う。

「 うん 」、と天音も精一杯高い声で言った。

「 …… どこかしら… 」

同じ制服を着てぞろぞろとやってくる生徒たちの姿に、遥香が困ったような顔になる。

「 あそこですよ 」

しかし、始はその能力ゆえに天音の姿をすっかり確認していた。

遥香にそう告げながら薄暗い講堂の中 始は、カメラをかまえる。

パシヤ。

「あ、本当」

遥香もまた天音を見つけた。声をあげて 身を乗り出して、そして始を見つめる。

カメラを構えて その先に娘の姿をとらえている青年。

「あ」

席について、落ち着かないように辺りを見回していた天音は、ふいに遥香と始にきづいて声をあげた。

笑顔で手を振る天音を見て、隣に座っていた同級生が話し掛ける。

「あの人 お兄さん？かっこいいね」

しかし天音が首を振ると不思議そうな顔をする。

「え…じゃあ親戚？」

「ううん」

驚いたように目を見張って、おそろおそろ尋ねる。

「お…父さん…？」

「違う。でも私の大切な人！」

パシヤ。

シャッターを切るたび、始は怖くなる。

不安になる。

天音の姿をひとつひとつ、おさめるたび、嬉しいような 悲しいような…そんな気持ちになる。

ためらいなく、シャッターを切り続けていた始はふっと怖くなって動きを止めた。

この、フィルムを使いきってしまったら 終わりのような気がして…。

制服から着替えてきた天音は、その場を見回すなり遥香に首を傾げる。

「 始さんは？」

「 暗室よ」

それを聞くなり天音は、すぐに始の部屋につながる階段を下りだす。

「 始さん」

ノックする。

胸騒ぎがする。

「 はじ 」

扉が開いた。

現れた始は、もうスーツを脱いでいた。それでも、その姿を確認して安堵のため息をもらす。

「 今行こうとしたんだ」

だがそれも束の間だった。穏やかな始の笑顔を見て…不安が再び天音の心に忍び寄る。

「 …… 始さん…？」

不安そうな顔をする天音に、始は笑いかけた。

「 皆に、話があるんだ 」

今日が、潮時だ。

告白

「始さん？」

いつになく神妙な顔つきでやってきた始に、遥香が不安そうな顔になる。

ただことではない。始からはつけられる空気から、それを察する。

「お話があります」

「……始さん……」

天音が、聞きたくないというようにその名を呼んだが始は続けた。

「俺は人間じゃありません」

オレハニンゲンジャアリマスン。

「……すみません」

凍てついた二人を見て始は謝る。

「……俺は……」

「関係ない。それがどうしたの!？」

続けようとした始を遮って、天音は怒ったような声をあげ、始にすがりついた。

「始さんは、ずっと　ずっと私たちを守ってくれた……!」

自分だって馬鹿ではない。九歳からずっと今まで、始と過ごして、変わらない彼。ただたんに、いつまでも若々しいというのではない。

彼は、年をとっていない。

「……だから……ずっとこれからも……!」

「天音ちゃん……」

その言葉ほど嬉しいものはなかった。思わず、その頬がほころぶ。

「…………… 始さん」

遥香もまた天音と同じ気持ちだというように、そう告げた。そんな顔を見ると、決心が揺らぐ。

しかし、始はもうわかりはじめていた。

天音が、自分に向ける感情の意味を。

自分がそれを悟のが、少し遅すぎたのかもしれない…。

大切に 大切に。

この二人がいたからこそ、今の自分がある。

ジョーカーとして破壊と殺戮を繰り返していたアンデッド。

始が今最も愛するものの祖先であるヒューマンアンデッドは、まずはその入れ物を与えた。

そして更に、彼のまわりの人間たちは彼に愛する事を教えてくれた。

暗室の赤い光の中を歩きまわりながら、始はできあがった写真を見て笑んだ。

うまくできた。

結局、カメラの腕があがったかどうかは分からないが、始の中ではその写真はうまくできていたほうだ。

最後に せめて、これを残せてよかった。

天音の父の代わりになるうだなどという、勝手な考えはない。

だが、二人を守りたいとは思っていた。

そう願ったことが、あまりにも大きな犠牲を生んでしまったが…。

「…………… 剣崎…あと少しだけ、俺に時間をくれ」

始は呟く。

どこにいるかも分からない、自分のために人間であることを捨てた唯一無二の友に向けて。

そして、ポケットから写真を掴み出す。

「
…アンタに返す。今まで…ありがとう…」

三人の家族が、そこから始に笑いかけていた。
。

告白（後書き）

時間の繋がりが不自然だ……（
何かもうぐちゃぐちゃ（笑）
；
）

痛み

翌朝。

「始さん」

いつまでも出てこない始を不審に思っ、天音はやってきていた。名前を何度か呼んだが、返事はない。

そして開けた扉のむこう、その姿はなかった。

ぽつんと響いた天音の聲が持ち主を失った部屋のなかに響く。

後ろからやってきた遥香が、立ち尽くす天音の肩に手を乗せた。

口数がすくなく多くを語らない同居人だったが、いつかこうなるのではないかということは充分予測できた。

そんな、彼の最初で最後の独白は自分が人外の実在であるというものだった。

ゆらゆらと歩きだしていった天音は机の上を見て動きを止める。

「天音……」

気掛かりそうに名前を呼んだ遥香が向かった先には、昨日の入学式の写真がならべてあった。

「…これ……」

だが、天音が手にしたのはとうの昔に失ったと思っていた写真だった。

幼い自分と、笑顔を浮かべる父の顔。

そして、同時に封筒の存在にも気付く。

あわただしくそれを破って、中を取り出す。

天音は食い入るようにそれを見つめて、やがて。

始さん……。

嗚咽の中、呼んだその声に、答えてくれる存在はもうここにはいない…。

『だけど、必ず俺は天音ちゃんたちを見守ってる。約束だ』
終わりに書かれたその文字にすら始の思いが宿っているように見えた。

彼は姿を消した。しかし、その言葉だけが、天音たちのもとに残されて おそらく最後まで残り続けるのだろう。

部屋の中ではためくカーテンが、よく見慣れた土色のコートの裾のように見えた。

泣きたい、という気持ちは今なら理解できる。

これも全て、あの親子とかけがえのない友がくれたものだというのに。

歩きだして始は、空を仰いだ。

こんなにも胸が痛いのなら、知らないほうがよかったなんて思うのは、自分勝手だな…。

苦笑しながら始はふと、ポケットから一枚の写真を取り出す。

満開の桜のもと、笑う母娘の姿。

しばらくそれを見つめて始は、ポケットにしまった。

大切に 大切に。

再会と別れ

秋ももう終わりに近づいてきているのか、肌寒い。

吐く息の白さをながめながら、男は時計を見ていた。

「……随分と、善良な組織になったんだな、ボードは」

唐突に、ベンチに腰掛けていた男にむかって口を開く。それを聞いた男は、顔をあげ、目の前にある姿に笑んだ。

「見たのか…記事」

うなずいた男を見下ろす彼は、やや小柄だががっしりとした体型をしていた。

土色のコートをはためかせながら、見下ろす顔の中、瞬きをしないやや大きな目は浮いて見えた。

「…ああ。一応新聞は読むようにしているからな」

座ることなくそう告げた彼を 橘朔也はじっと見上げ、感慨深そうな笑みを浮かべた。

「なんだ」

とたんに不快そうに顔を歪める相手。記憶のままのその表情に、橘は思わず笑った。

「いや…お前は変わらないな」

今や壮年期を終えるような年になって、四十年前と変わらぬ姿の彼を見ると余計に時の流れを感じる。

「…お前は…老けたな」

つぶやいた彼を見ながら橘は笑う。

「 当たり前だ、もう六十近い年だからな」

「 ……そうか」

笑った橘とは対照的に、うつむいた彼の顔は暗かった。笑っていた橘も、思わずだまる。

時が経てば、当たり前前に世代交代が行われる。橘にしても、かつては指示をされる側だったのに、今では指示をする側になった。

睦月ももう初孫が生まれたとか。　　虎太郎は、それをひどく悔しがっていた。

しかし、そんな世代交代を肌で感じながらも　決して老いることのない己の身を、彼はどう思っているのか：橋にははかりかねた。

「：残念だが：生きているうちに：奴にはもう会えないだろうな」
ふっと寂しげに橋はささやく。

目の前の彼と同じく、老いることのない存在が、橋の知る中でもう一人いる。

そうか、と擦れた声でつぶやいた彼は寂しげな表情になった。
だが、それだけではない。

今回は土産話もある。

「：物資提供の件なんだがな、ただただ善良になった訳じゃあないんだ」
顔を上げた彼の、不思議そうな顔に、橋は笑う。

「　あの近辺の、紛争地域でな、最近英雄がいるんだ」

「：英雄？」

「子供達や、紛争に巻き込まれた一般人を救ってるやつが。　不思議なことに、何度も攻撃されているのに、何度も　色んな場所で同じような噂が流れる」

驚いたように目を見張った彼は、本当に驚いたらしく口まで開いていた。

「　だから、ボードの活動も、もしかしたら奴も見てるんじゃないかな」

願望にすぎない。

その噂が真実かも分からない。それでも、彼だと信じたい。

「　下心があるんだな、結局俺にも」

笑う橋をみて、彼もようやく笑った。

「　剣崎らしい…な」

「ああ」

運命と戦う。

そういつて去った彼は、今もどこかで戦っているのだろう。

遠く離れた異国の地で、戦う彼の事に少し思いを馳せたのち、やがて彼は帰る、と言った。

「もう 行くか」

「ああ」

躊躇うことのない、きっぱりとした返事。

最近、こうした別れが今まで以上に悲しく感じるのは…やはり年のせいだろうか？

去っていく、土色のコートの後ろ姿を見ていた橘は、少しでも彼を止めようと、口を開く。

「始 お前は、これからどうするつもりなんだ？」

その問い掛けに、立ち止まった彼は振り返る。

「俺たちが」

生きるという役目を終えた時。

男は 相川始は、何も言わなかった。

ただ、その口元に深い笑みを刻んで、再び背を向けて歩きだす。

風を

ひとり、ベンチに腰掛けたまま、橘はつられるように笑った。

小夜子。

俺も、あと少しで君に会えるな…。

悲しいような ほっとするような。まだ体験したことのないその最後を想像して、橘は真つ青な秋晴れの空を見上げる。

自分たちが、いなくなったのちも相川始は、人間として生き続けるであろう。

それが、彼の 剣崎一真の願いだからだ。

共に、永遠を生きるものでありながら再び出会うことはない両者の事を思うと、胸が少し痛い。

そんな彼のものを、肌寒い秋風が吹き抜けていく。

風が せめて、風だけでも…。彼らのものを駆け抜けていく風だけでも、互いのことを知らせてくれればいいのに…。

歩きだした両者の、わずかな邂逅の場となったベンチの足下。

降り積もった落ち葉が、流れる木枯らしに、物悲しい旋律を奏でていた。

風を（後書き）

終わりました＼（＾Ｏ＾）ノ

初めて完結させた作品です（；＾|＾A

ここまでお付き合い下さったかた、ありがとうございました！
よかったら、他の作品も見てください（ノ>。>。）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0666q/>

せめて彼に、風を

2011年4月24日22時28分発行